

明末奉教士人の社会関係と天主教受：容徐光啓を中心に

史, 習隼

<https://doi.org/10.15017/1654591>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 史 習雋

論 文 名 : 明末奉教士人の社会関係と天主教受容
—徐光啓を中心に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、明末の代表的な奉教士人である徐光啓をめぐる多様な社会関係を通じて、天主教が士人社会に伝播していくプロセスを考察し、明末における天主教受容の実態に再検討を加える。

明末の天主教受容に関する先行研究では、徐光啓をはじめとする、著名な奉教士人の個人的な事績に関心が集中していた。その一方、奉教士人どうしの社会関係や、それを通じた天主教信仰の伝播に関する研究は、必ずしも十分ではない。このため本論文では、徐光啓をめぐる親族・地縁・師弟・友人などの多様な社会関係が、士人社会における天主教や西洋学術（西学）の伝播に果たした役割を、徐光啓に関わる漢文史料と、イエズス会宣教師による欧文史料の双方を活用し、総合的に検討することにした。

本論文は、序論および第一部（第一章～第三章）、第二部（第四章～第五章）から構成される。序論では、徐光啓の伝記と著作、および彼の西学・天主教受容における功績に関する、膨大な先行研究を整理・紹介し、そのうえで本論文の課題を提示する。つづく第一部では、徐光啓をめぐる交友・地縁・師弟・親族などの多様な社会関係を通じて、天主教信仰や西学が士人社会に伝播していくプロセスを、彼の故郷であった上海県・松江府の地域社会や、明末期の朝廷政治の動向と関連して考察する。

第一章では、徐光啓と主要な奉教士人たちとの交友関係と、信仰上の交流に注目し、士人社会における天主教受容の諸相を論じる。まず明末における天主教の「三大柱石」と称された、徐光啓・李之藻・楊廷筠の相互交流に注目し、特に彼らが天主教的な儀礼をとり入れた葬礼を実践したことが、天主教信仰の伝播に有した意義について論じる。ついで徐光啓の友人であった奉教士人のなかから、許樂善と瞿汝夔の事例を論じる。彼らは徐光啓の影響で改宗したが、蓄妾などの生活習慣や、仏教・道教などの伝統信仰の影響により、信仰を堅持することができなかった。

第二章では、徐光啓をめぐる同科・地縁・師弟などの社会関係を通じた、天主教や西学の受容について検討する。徐光啓の同年同科の進士や、彼と同郷の松江府の知識人たちの中には、徐光啓の直接的・間接的な影響を通じて、西学に関心をいだき、その普及に貢献した者が多かった。さらに徐光啓の高弟であり、かつ天主教徒ともなった孫元化・李天経の事例を検証し、徐光啓の師弟関係や官界における人脈が、天主教信仰・西学の重要な伝播経路の一つとなり、明末期の政治・文化状況にも影響を与えたことを明らかにする。

第三章では、徐光啓の親族関係を通じた天主教伝播のプロセスを論じる。徐光啓の同族や姻戚は、上海・松江地域の有力郷紳であり、かつ天主教・西学受容の主導者であった徐光啓の影響により、多くが天主教に改宗し、信仰を熱心に実践した。特に徐光啓一族の女性信徒は、上海・松江地域の名門同族に嫁ぎ、その家族や近隣の人々に改宗を促すことによって、地域社会における天主教の伝

播に大きく貢献していた。また明末清初の上海・松江地域では、男性・女性信者が組織した多くの信心会が発達し、信者のネットワークを拡大する重要な経路となっていた。

つづく第二部では、徐光啓が官界や士人社会において有する人脈を通じて、イエズス会宣教師たちの布教活動を支援し、彼と宣教師たちとの交友関係が、イエズス会が採用した「上層路線」による布教の重要な経路となったことを検証する。

まず第四章では、徐光啓の官界や士人社会における人脈が、在華イエズス会による布教事業の展開に果たした役割を、とくに徐光啓と四人のイエズス会宣教師の関わりに注目して検討する。徐光啓のような、官界や士人社会で声望と影響力を有する奉教士人は、その人脈を通じて、宣教師と彼らをもたらした西学を紹介・推薦し、イエズス会の布教活動の拡大に大きく貢献していた。このような有力な奉教士人のもつ広汎な社会関係は、イエズス会が「上層路線」による布教を推進する重要な基盤となっていた。

つづく第五章では、明末期に発生した反天主教運動、特に万曆四四（一六一六）年の南京教難に際して、徐光啓がイエズス会宣教師らに与えた支援や助言について検証し、彼が平時における天主教の教勢拡大だけではなく、危機的状況における布教活動の維持にも大きく貢献していたことを明らかにする。徐光啓は南京教難に際し、危機に瀕した宣教師たちを保護するとともに、マテオ・リッチの墓地を保全し、朝鮮布教計画を模索するなど、その政治的・社会影響力により、在華イエズス会の危機回避に尽力したのである。

結論では、本論の各章の考察を総括し、徐光啓の社会関係を通じた天主教や西学の伝播が、在華イエズス会の採用した「上層路線」や「文化適応」などの布教方針と密接に関連していたことを示し、今後の課題として、日本と中国におけるこれらの布教戦略の実践と影響に関する比較検討の必要性も提起して結ぶとする。